

開会挨拶

鈴木 将史

皆様、おはようございます。本日は「周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム」にご参加くださり、心より感謝申し上げます。

参加者の内訳

本日のシンポジウムには、日本、中国をはじめ、アメリカ、スペイン、イタリア、韓国、フィリピンなどから、120名を超える研究者の皆様が集っていただきました。遠路日本まで、ようこそおいでくださいました。本学を代表して、皆様のご来学を心から歓迎申し上げます！

オンラインにて分科会の発表をされる方もおり、基調講演を含め、本日、明日の両日で、60本近い研究発表が行われる予定です。ご準備をいただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

本日ご出席の先生方は、当時の状況についてよくご存じのこととは思いますが、記念シンポジウムの開催に当たり、1974年に行われた会見の様子を少々振り返ってみたいと思います。

周総理との会見

50年前の12月5日、創価大学創立者池田大作先生は周恩来総理と会見されました。それは、池田先生の第2次訪中の答礼宴の席上、中日友好協会の廖承志会長から「周総理が待っております」と突然告げられ、実現したそうです。

池田先生は闘病中であった周総理の体調を案じ、「お会いするわけにはいきません」と固辞されましたが、「これは周総理の強い希望なのです」と言われ、周総理が入院する病院へ向かわれました。

会見を強く希望した周総理に対し、医師団は「命の保証はできません」と強く反対されましたが、周総理は「池田会長にはどんなことがあっても会わなければならない」と強く決意されました。医師団は、ご夫人である鄧穎超女史に相談しましたが、「総理が、そこまで言うなら許可してあげてください」との夫人の言葉で、会見が許可されたとのことでした。

池田先生が病院に到着したのは午後9時55分、周総理は病院の玄関で立って迎えてくださったそうです。

会見では、医師からの「そろそろお休みください」とのメモを無視して、周総理は池田先生と語り続けられました。「20世紀の最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。全世界の人びとが、お互いに平等な立場で助け合い、努力することが必要です」との周総理の言葉について、池田先生は遺言を聞く思いであったと述懐しております。

お二人が直接語り合ったのは、この一回のみ、時間は30分程度だったと伺っております。池田先生は、小説『新・人間革命』の中で「これが最初で最後の、生涯でただ一度だけの語りとなった。しかし、その友情は永遠の契りとなり、信義の絆となった。総理の心は伸一の胸に、深く注ぎ込まれたのである。」と述べておられます。

基調講演者の紹介

今回のシンポジウムでは、このお二人の一期一会の会見の意義について、深く考察を加えるため、それに相応しい先生方に基調講演を依頼させていただきました。

まず、この開幕式でご講演をお願いしたのは、日中友好会館の宮本雄二会長です。宮本会長は、1969年に外務省に入省し、中国との外交の最前線で活躍され、2006年からは特命全権大使として中国に赴任されました。退任後は「宮本アジア研究所」を設立し、アジアの平和構築に尽力しておられます。

宮本会長は、周総理と池田先生が会見した1974年、若手外交官として在中国日本大使館に勤務しておられ、池田先生から会見内容を伝えたいとの連絡を受け、大使館の上司と共に話を伺ったそうです。長年日本外交の中核で活躍された宮本会長にご講演いただけることは、誠に意義深いものと感じております。

また、本日午後には、「対話による東アジアの平和構築」と題し、会見の歴史的・政治的な意義を掘り下げる機会といたします。ここでは、政治学や政治思想史の分野で、日本を代表する学者であられる姜尚中先生、そして日本史、東アジア思想史、東アジア国際関係史の専門家で、中国日本史学会会長でもある韓東育先生に、ご講演いただく予定となっております。お二人とも、両国を代表する学者であり、深いご高察が伺えるものと期待しております。

さらに、明日の午前中に行う全体会では、「周恩来・池田大作会見の今日的意義」と題し、さらに3名の先生にご講演をお願いしております。

まず初めに、北京大学の賈蕙萱教授です。賈教授は、池田先生の訪中の受入を担ってきた中日友好協会に勤務され、直接ご担当してこられました。2001年には、中国国内で初めて北京大学に「池田大作研究会」を発足させ、初代会長として池田先生の思想研究を先駆的に推進してこら

れた方です。

次に、西園寺一晃先生です。西園寺先生は北京大学を卒業後、朝日新聞社に入社し、中国担当記者として活躍されました。1974年、池田先生の初訪中時には、北京を取材中で、池田先生を北京飯店に訪ねられ、夜9時から3時間にわたって懇談されたそうです。その時、池田先生が「両国の友好には青年の交流こそ最も大切」と仰っていたことが、今でも印象に残っていると教えてくださいました。また、西園寺先生は、中国語人材の育成にも尽力され、その年の10月、本学の「第1回中国語弁論大会」にも、多大な尽力をいただきました。

3人目にご講演いただく方は、周総理の母校・南開大学の紀亜光教授です。紀教授は、1999年、南開大学周恩来研究センターの王永祥所長に同行し、本学に研究滞在されました。そして、創大との共同研究は『周恩来と池田大作』という書籍として日中両国で出版されました。

その後、南開大学の学生たちとともに周総理と池田先生について学ぶ活動を進め、2006年には「周恩来・池田大作研究会」を発足されました。この研究会の発足日が12月5日、会見の日を選んだことにも、深い意義が込められています。今回のシンポジウムには、この研究会の出身者も多数参加されております。

両日の6名による基調講演を通して、これからの若い学生の皆さんに、日中友好の精神と世界平和の重要性を伝える機会にしていきたいと思います。

創立者の対話活動

さて、ここからは、今回のシンポジウムのテーマを創立者の行動から掘り下げていきたいと思えます。「対話による平和と発展」との今回のテーマの通り、池田先生は平和を実際にたぐり寄せる具体的な手法として、胸襟を開いた「対話」を重視し、周総理をはじめ多くの識者との「対話」を種として、「平和と発展」の道なき道を切り開いてこられました。生前、世界の識者との対話は7000人以上に及び、その多くが対談集として発刊されており、80冊以上に達しています。

対談集の内訳統計

池田先生が対談された方を地域に分けると、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、アフリカの五大州を網羅し、34か国・地域の方々となります。

1972年にクーデンホーフ・カレルギー博士との対談集を発刊して以来、2017年の王蒙氏との対談集まで、対談相手は歴史学者、経済学者、物理学者、政治家、作家、教育者等多岐にわたり、ノーベル平和賞受賞者も多数含まれております。また池田先生は仏教者でありながら、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、儒教、道教など異なる宗教の方々との、いわば「文明間の対話」、「宗教間の対話」を繰り広げられました。

対談の分野は、歴史、政治、経済、人権、環境、文明、哲学、宗教にとどまらず、文化、芸術、

文学、教育、科学、生死論、宇宙論など多岐にわたり、扱っていないジャンルはないと思われるほどです。

これら 80 数冊には、21 世紀の現代に警鐘を鳴らす内容が多く、どの対談集でも、国や宗教の壁を越え、英知が真剣にぶつかり合い、未来と平和のための意見を昇華させています。

また、その他多くの創価学会向けの指導書や未来部への指針、宗教教学など、多くの著作も対談形式を選んで進められました。池田先生は、「他者との対話」を軸に、いわば自身のライフワークとして、50 年以上にわたり、繰り返し世界に訴えかけ、若い世代のために書籍として残されました。

トインビー対談

池田先生の世界との対談の始まりは、アーノルド・J・トインビー博士との対談であり、皆様もよくご存じのことと思います。

池田先生は、トインビー博士の要望に応じて 1972 年と 73 年に、ロンドンの自宅を訪れ、2 年越し、延べ 10 日間、計 40 時間に及ぶ対話を展開されました。博士は池田先生に「あなたと話をすると、自分の学問の一切が整理される」と対談を喜んでおられました。その後の往復書簡を含めて、1975 年春に、『二十一世紀への対話』の日本語版が完成し、翌年には英語版『Choose Life』が出版されています。

この対談集は次々と各言語に翻訳され、現在までに 30 以上の言語で出版されており、世界中の指導者や識者の強い関心と高い評価を受けてきました。今では大学や高校の教材として使っている国もあり、「人類の教科書」と呼ぶ方も多くいらっしゃいます。対談の領域は、平和、環境、人権、倫理などの課題から、根底の問いである「生と死」、「人間とは何か」、「生命とは何か」との話題にまで及んでいます。

この両者の対談は、「東洋と西洋」の対話であり、「宗教間の対話」の先駆けとなりました。

なお、本学が 2005 年に初めて中国で行った、「第 1 回池田大作思想国際学術シンポジウム」も、この対談集に基づいて、「『二十一世紀への対話』と現代社会」をテーマとして行われました。本日までご参加の方々の中には、この第 1 回から参加してくださっている方もいらっしゃいます。

中国の対談者

中国の対談者の名前を挙げると、敦煌文物研究所の常書鴻氏、作家の金庸氏、北京大学の季羨林氏、儒家思想のドゥ・ウェイミン氏、「東洋のレオナルドダヴィンチ」とも称される香港の饒宗頤氏、台湾・中国文化大学の張鏡湖理事長、華中師範大学元学長の章開沅氏、元文化部長の高占祥氏、中国教育学会会長の顧明遠氏、香港中文大学元学長の劉遵義氏、作家の王蒙氏等がおられます。内容も中国古代思想から現代中国までのあらゆる時代の思想や歴史を語り合い、両国の次世代へのメッセージが込められています。どの対談集も、日中友好と世界平和の共通点を基に、

未来への希望を青年に託す一書になっています。

対話の重要性

2007年に発刊されたドウ・ウェイミン博士との対談集では、両者が「対話の重要性」について語り合っています。ドウ博士は「対話は自己認識や自己批判を深めていけるチャンス」と述べ、池田先生は「異なる価値観を尊重し、新たな対話を通じて人類の共通の大地を広げることが大切」と強調したうえで、「変革への挑戦を続け、『対話の文明』を築くことが、世界平和への壮大にして着実なる挑戦である」と述べています。

池田先生がこれまで繰り返し広げてきた対談集の発刊は、人類の未来が平和であってほしいとの願いからであり、青年への期待・遺訓として、多くの国から称賛されてきました。各国から受けられた名誉称号の数々は皆様も知るところであり、本学では本部棟で常設展示として毎年学生・来学者に紹介しております。

3人に捧ぐ栄誉

2006年に、池田先生は北京師範大学から200番目となる名誉称号を授与され、本学数千人の学生を前に、「この栄誉は、トインビー博士、周恩来総理、コスイギン首相に報告申し上げたい」と3名との会話を振り返るとともに、周総理との会話の様子も改めて語られ、「総理とお約束した日中の平和友好は絶対に崩れない、いな、永遠に磨きあげていくべき『金の橋』である」と力強く宣言され、学生に後事を託されました。

最後に

今月15日、池田先生の一周年に際し、本学では全学集会が行われ、学部生、大学院生、留学生、創価女子短大生、及び教員・職員が一堂に集いました。創立者の祥月命日であるこの11・15を池田先生への感謝と決意を新たにする日として「若き創立者の日」に制定し、後継の決意の碑が除幕されました。

「私たちは若き創立者として 生命尊厳の哲学を根本に 人と人との心を結ぶ平和の大連帯を 断じて広げてまいります」等の3つの誓いが力強く宣言され、「皆が創立者の自覚！」という新時代の創価大学がスタートし、新たな歩みを学生と共に元気に開始しております。

最後に、今回のシンポジウムの大成功と、皆様のご健勝を祈念するとともに、テーマの通り、「対話」によって活発な議論が交わされることを心から念願し、開会の挨拶といたします。

大変にありがとうございました。